

態度をほのめかす例示：日本語引用表現「みたいな」の分析

著者	臼田 泰如
雑誌名	国立国語研究所論集
号	20
ページ	149-169
発行年	2021-01
URL	http://doi.org/10.15084/00003097

態度をほのめかす例示 ——日本語引用表現「みたいな」の分析——

白田泰如

国立国語研究所 研究系 音声言語研究領域 非常勤研究員

要旨

本研究では、日本語の会話において、なんらかの発話を引用し、「みたいな」が置かれるような発話を分析する。従来、このタイプの発話についてはいくつかの研究がなされてきているが、多くの場合自然会話のデータは用いられておらず、実際の会話における参加者が何をするためにこうした発話を用いるのかということは十分には明らかになってきていない。そのため本研究では、国立国語研究所で現在構築中の『日本語日常会話コーパス』モニター公開版を利用し、会話分析の手法によって、上記のタイプの発話を分析する。分析の結果、以下のことがわかった。自分の発話に続けて発話する場合、語った事態や出来事に関して自分がどのような態度をとっているかが表出される。他の人の発話に続けて発話する場合、その参加者が語った事態や出来事に関する聞き手の理解を例証する。これらにより、なんらかの語られた事態や出来事に、可能な反応の形で続きを付け加えることで、事態や出来事についての態度を提示する方法になっており、態度を明示的に記述することなく言及することで、語り手と聞き手が出来事や事態からそれぞれ同じ態度へと至ることが目指されていると考えられる*。

キーワード：日常会話、相互行為、『日本語日常会話コーパス』、引用、態度

1. はじめに

日本語の日常会話において、自分や他の誰かの発話らしいものを引用する際に、引用部分に「みたいな」を後置する発話がしばしば観察される。具体的には次のようなものである。

データ 1 [会話 ID: T001_014 803.932 秒 -811.446 秒]¹

01B そんでこう*お - 落とすともう (0.4) * ころ [奈落の底に落ちてい [くわけよ h み h か h ん h は h

*((両手を胸の前)) *((右手の指を伸ばし、顔の横から斜め下に動かす))

02D > ごろ < ご r aha:

03C [うん うん うん うん ♪

(0.5)

04D -> 何してくれ [てやが [るんだ お前 みたいな

05C [ahaha [hahaha .h

* 本研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(プロジェクトリーダー: 小磯花絵) の研究成果である。また日本学術振興会科学研究費交付金若手研究 (B) 「会話における対人関係の実証的研究: 自然会話データを用いて」(研究代表者: 白田泰如, 課題番号 17K13457) の助成を受けて行われた。2020年4月14日 NINJAL サロン (国立国語研究所・オンライン開催) において多数の有益なご指摘を頂戴した。記してここに謝す。

¹ 転記に用いた記号などについては本論文末尾「本研究で使用した転記記号」参照。

06B

[ahaha

データ1は仕事仲間数人で食事をしている際に学生時代のアルバイトが話題になった場面の一部である。Bが1行目において語っているのは、急斜面に造成されたみかん畑での収穫作業のアルバイトについてであり、摘果したみかんを満載した容器を適切に扱わないと、せっかく収穫したみかんもろとも「奈落の底」へ転がり落ちていってしまい回収は不可能になる、という内容のことが語られている。4行目は、その話を聞いたDが、その話に対して反応する位置で行なった発話である。この発話は、Bがそのアルバイトをしていた状況において、もしBがみかんの容器を転ばせてしまった場合に、Bのその時点での雇用主がBを叱責する際に言うであろう発話を模して、「何してくれてやがるんだ お前」という発話を、「みたいな」によってマークして発話している²。本研究がこれから検討する「みたいな」によって引用をマークするターンは、この4行目において用いられている。本研究の問いは、このような「みたいな」によって引用をマークするターンによって参加者は何をしているのかということである。

2. 先行研究

「みたいな」を用いる発話は、いわゆる「若者言葉」という位置づけがなされることがあった(佐竹 1995, 1997, メイナード 2004, 福原 2013)。以後、「みたいな」によって発話の引用をマークする発話を指して「Qみたいな」という表記を用いる。「Qみたいな」の機能としては、先行する文脈の物事について類似のものを提示する(メイナード 2004, 加藤 2005)、先行する文脈の物事を精緻化する(Suzuki 1995)、正確にそれそのものではないということを明示的にマークする(メイナード 2004, 福原 2013)、言及した物事から距離をとる(Suzuki 1995)、婉曲に表現することで話し手自身の立場や社会的負荷を軽くする(佐竹 1995, 1997, メイナード 2004, 福原 2013)などの指摘がなされてきた。

これまで挙げられてきた機能については、本研究ではそれらそのものの妥当性の判断は行わない。データと方法論については次節で述べるが、実際に観察された経験的データをもとに議論を進める本研究にあって、あらゆる機能を網羅的に検討するのは困難であるし、目指すところではない。

その上で指摘すべき点としては、これまでの研究はほとんどが書かれた言葉において擬似的に話し言葉を再現したものや、実際にそのように書かれて用いられた言葉、あるいは、自然性に疑問のあるテレビの録音データなどを使用している点である。少なくとも、生きた会話において「Q

² こうした場合、実際にそのとおりの発言がなされたかどうかは、その状況において誰かがなしえた発話として理解できることと関係がない。事実、この断片の直後、Bは、農場主は実はみかんがひと籠なくなっても大して気にしていなかったという語り続けている。そうした事実とは関わりなく、この時点においては、4行目は仮想的な農場主による仮想的な叱責として理解できる。付け加えるならば、ある時点での参加者の理解はその時点までに開示され共有された情報に基づくほかない。そのあとで明らかになった情報はその時点では利用できないのだから、そのあとで語られた事実がどうであれ、その時点での資源に基づいて理解しているはずである。あとで語られた情報に基づくような、俯瞰的な視点からデータの理解を試みることは瞬間瞬間の参加者の理解を歪める可能性があるため、会話分析ではそのような分析を慎重に排除する。

「みたいな」という言語現象がどのようなものかということについては、十分検討されてきたとは言えないであろう。

また、生きた会話をあまり扱っていないという点に関連して、実際の会話において不可避に生じる、その時点の会話において何が参与者にとっての課題になっているのか、という問題が素通りされているということも無視できない。言葉の使用に限って考えても、ある時点である言葉がある機能を担って用いられるためには、それがそのように用いられていることが理解可能な文脈が必要になる。極端な例を言えば、あらゆる発話は、それが演劇の練習として発されていると強弁しさえすれば、すべての発語内効力を停止できる。だからこそ、今そのときに何が問題になっており、そのために何が発話されたのか、つまり 'Why that now (Schegloff and Sacks 1973, Schegloff 2007)' という観点が必要になる。このことが問題になる一つの論点として、上に挙げた機能のうち、婉曲に表現することで話し手自身の立場や社会的負荷を軽くする（佐竹 1995, 1997, メイナード 2004, 福原 2013）というものについて触れておく。

M1N011: うーん。

M1T001: でもそういう浅はかな恋愛ってのは本当にしてほしくないんだよ。

M1N011: でもさあ、浅はかな恋愛を続けることによってなんての、本当の自分の好きな人っていうか自分の大切な人っていうのをこう、探すために何回も経験していきたくて[ほうが]

F1X007: [経験]があるから今があるみたいな。

M1T001: 経験って言ってもそういうやっぱり経験しなきゃ分からないことなんだけど、その中絶とかその離婚とかってのはやっぱりね辛かったって言ってるし、そういう経験はしないにこしたことはない。（福原 2013: 111）

この例は福原（2013）が挙げている、テレビ番組「真剣 10 代しゃべり場」での会話の一部である。この中の FIX007 の発話について、福原は下記のように分析する。

F1X007 は、恋愛経験が豊富であり、それが今の自分にプラスになっていることを、6 行目「[経験]があるから今があるみたいな。」と発話している。このように、相手の意見や考えについて否定的な評価をし、それを直接伝えることは、聞き手の【PF+】³を脅かすことになる。そこで、「みたいな」を使用して「私の意見はあなたの意見をきっぱりと否定するものではない。むしろあなたが正しいかもしれないので、間違っているなどとは言

³ 福原（2013）では、Brown and Levinson（1987）の「フェイス・ワーク」の枠組みにおけるポジティブ・フェイス（PF）とネガティブ・フェイス（NF）を精緻化し、以下のような概念として整理している（p.103）。

PF の【肯定的特徴】：理解されたい、仲間になりたい（以下：【PF+】）

PF の【否定的特徴】：嫌われたくない、無視されたくない（以下：【PF-】）

NF の【肯定的特徴】：自由でいたい、独立していたい（以下：【NF+】）

NF の【否定的特徴】：束縛されたくない、押し付けられたくない（以下：【NF-】）

いません」あるいは、「私はこのように考えるけれども、あなたの考え方が間違っている
とは言いません」ということを聞き手に伝え、聞き手の【PF+】を保持するのである。

(福原 2013: 111)

問題にしたいのは、F1X007 行における「みたいな」が対人配慮のために用いられる必要があると
参与者に理解されているかどうか、つまりそうしたレリヴァンス (relevance, ある行為やふるまい
などが、ある状況に鑑みて妥当、あるいは必要であるかどうか) があるのかどうかということ
である。福原 (2013) によれば F1X007 行は先行する発話に対して不同意を表出しており、
その不同意における負担を軽くするために「みたいな」という語句を用いて、ポジティブフェイス
の保持を図っている。しかし、掲出された事例のみを見ると、F1X007 が M1T001 に対する不
同意の発話なのか、それとも直前の M1N011 の内容がよくわからなかったなどの理由で可能な
言い換えを提示し、理解の確認を求めているのか判断できない。もし後者であるなら不同意の緩和
というポライトネスストラテジーの使用にはレリヴァンスがないことになる。こうしたことを
判断するには、例えば F1X007 がどちらの方を向いて発話されているか、M1N011 の発話がな
されている間に F1X007 の話者は何をしているか (細かく頷いている、発話者に視線を向けている、
など) あるいは M1N011 の話者は F1X007 の発話中および直後に何をしているか、といったこ
とを検討していく必要がある。それらの要因はとりもなおさず、参与者たちがまさにこの会話を
理解し成り立たせるために利用している資源であり、それらを欠いている限り正しく理解でき
ないのは無理もないことなのである。従ってここで問題にしていることは、ある言葉やふるまいが
ある行為の入れ物として用いられることに、参与者のそのときの理解に照らしてレリヴァンスが
あるかどうかと、それが十分に経験的に判断できるようにデータを取り扱っているか、という二
段構えのものであることがわかる。後者の問題が解決しないことには前者の問題について検討す
ることができない。

次節では、このような方法論的不備に陥る可能性を踏まえて、会話の経験的研究に適したデー
タとして本研究が使用する『日本語日常会話コーパス』と、それを分析するための方法論である
会話分析について説明する。

3. データと方法論

本研究で扱うデータは、国立国語研究所において構築が進められている『日本語日常会話コー
パス (CEJC)』モニター公開版 (小磯ほか 2020) である。CEJC は日常生活における会話の多様
性をできるだけ反映し、さまざまな研究に利用可能な形で提供するため、音声および映像と文字
起こしテキストを利用可能な形で提供するほか、以下のような特徴を備えるよう設計されている。

規模 : 200 時間分の会話データ (完成時、モニター公開版は 50 時間)

代表性 : 年齢・性別・属性・会話の種類を (できるだけ) バランスよく

検索性 : 形態論情報 (品詞、文中の位置、発話時間など)

上記の自然会話データについて、会話分析 conversation analysis (Sacks, Schegloff & Jefferson 1974, Schegloff 2007) の方法論に基づく分析を行う。会話分析とは、「人が日常生活の中で従事する多種多様な実践的諸活動——会話、会議、診察、面接、ゲーム、授業、接客等々——を構成する出来事や人びとの振る舞いが、いかにしてその場で常識的に合理的な理解可能性を備えるものとして成立しているか、この秩序を産出するための社会成員の「方法」(Garfinkel 1967) を、発話をはじめとする相互行為中の振る舞いの観察を通じて明らかにする」方法論である(平本 2018: 2)。我々はやりとりを行いながら日常のさまざまな活動を行っている。そうした活動の中のやりとりに用いられる言葉や身振りなどのふるまいは、すべてがそうではないにせよ、その活動を構成する一つ一つの行為や活動全体を成り立たせるための参加者の指し手になっているものを含んでいる。会話分析が採用する分析方針は、どのようにしてそうしたふるまいが行為を構成する指し手になっているのかを明らかにすることである。

データ 1 に即して、上記のような方針に沿った具体的な分析の例を示す。1 行目で B は「奈落の底」という表現を用いて、坂の下にみかんが転がっていくという事態を記述している。「奈落の底」は文字通りには、

1. 地獄の底。「奈落の底へ突き落とされる」
2. 抜け出すことのできない、どうにもならない状態。「極貧の奈落の底からはいあがる」
3. 物事の最終。果ての果て。「つぎかけ、つぎかけ。——まで飲み伏せ」〈浄・会稽山〉(デジタル大辞泉)

といったことを意味し、傾斜地の農道が「地獄の底」や「抜け出すことのできない、どうにもならない状態」につながっているなどということは、およそありそうもない(坂の下には民家や町があるはずだ)。だがもちろんここでのこの表現は十分に理解可能である。もっといえば、この「奈落の底」が一種の比喩で、急な坂の下にかごいっぱいのみかんをおちまけたら到底回収は不可能だという認識が表現されており、それが語られている事物(みかん畑でのアルバイト)の特殊さや困難さ、奇妙さといった、いわば語るに足る理由になっているということは、少なくとも参加者には、その特殊さを志向しつつも十分に理解されていると考えられる。Pomerantz (1986) はこのような、ある主張につながる事実の記述における極端な表現を extreme case formulation と呼び、ある物事を極端に表現することによって、それを踏まえた主張が正当であることの補強がなされることを論じた。

また、その「奈落の底」という表現が理解されていることを裏付けているのは、その次の 02 行目と 03 行目である。先に 03 行目を観察すると、01 行目のターン末を待たずに理解を示す反応を開始し、それを反復的に行なっている。ターン末を待たない反応は、例えば Sacks (1974, 1978) で論じられているように、ある種の「判じ物」とでもいうべき、理解に一定の前提知識を要するジョークの類に対して典型的になされる。そうしたジョークは、理解するためにある種の知識が要求されるとともに、それが理解できることでその知識を共有するグループのメンバーであることを立証できるという性質を持つ。その理解は早く達成されればされるほど、よりそのグ

ループの一員として深く馴染んでいることの証明になるだろう。従って、そのようなメンバーシップの立証になるような理解の表示は、反応の対象となるターンの終了を待たずになされることになる。

さて、データ1の語りは特殊なメンバーシップに結びついた知識を要求するようなジョークとは異なると考えられるが、文脈を十分に理解していることを前提とした極端な表現を用いているということは言えるだろう。この表現が即座に理解できたということは、ここまでの話を十分に理解してきたことの立証になる。従って、メンバーシップの場合と並行的に、ここでもできるだけ早い反応が目指されていると考えられる。言い換えれば、ここでターン末の反応機会を待たずに反応が開始されているということは、早いタイミングでの反応がレリヴァントであり、かつそれが可能であるということを示している。ついで02行目について考えると、02行目の「ごろご」は相対的に速いスピードで発話されており、言い終わるのを自ら待たずに笑い始めている。この発話が開始されているのは、ほとんど「奈落の底」と同時である。従ってこの発話自体は「奈落の底」という表現の理解可能性を証明する直接的な手立てにはならない。しかしこの時点で、「ごろご」_rという、みかんが坂の下に「転がっていく」ことを擬音的に示す表現がなされ得たということは、この時点でどのような事態が記述されつつあるかということが理解されていたことを示す。

そして、当たり前のようにだが、「ごろご」_rという表現が「みかんが坂を転がっていく」ことの描写として理解可能なのは、01行目において「落とすともう」何が起きるかが語られつつあることが明らかになっている時点で発話されているためである。これはなんらかの事柄が記述的に説明されたとき、それを実演して見せることで、その記述を十分に理解したことを示すプラクティスである（白田 2017）。さらにいえば、01行目の記述を待たずに02行目が発話されていることも、03行目と同様に素早く理解したことを示す指向に基づいていると考えられる。

このように、あるふるまいがなんらかの行為を構成する指し手になっていることと合わせて、それがそのように会話の中で参与者たちに理解されていることが証拠立てられるような別のふるまいを見てとることができる。そしてまた、こうしたふるまいは、分析者が特殊な訓練を積んでいるからわかるようなものではなく、第一義的に参与者たちが理解し（意識することはないにしても⁴）、それに基づいてふるまいを組み立てているものごとである。会話分析はこのように実際になされた会話を、ごく短い断片に絞って微視的に観察し、そこから見てとることのできる微細な現象を照らし合わせることで、参与者が何を参照してどのように行為を組み立て、やりとりを成り立たせているかということを分析する。

⁴たとえば、十分に習熟した言語を使用する際には文法のルールは、少なくとも常には意識されないだろう。実際、会話分析において文法や言語的システムは非常に重要な資源である（Ochs, Schegloff & Thompson 1996, Lerner 2003）。このような、相互行為において利用されているものの、それを意識的に利用しているとは限らないという事態を指して、ガーフィンケルは“seen but unnoticed (Garfinkel 1967)”と表現している。

4. 分析

本節では、これ以降で取り上げるデータが、大きく分けて二種類の連鎖環境において、仮想的な発話を引用する「Qみたいな」が用いられているという観察に基づいて分析を進める。二種類の連鎖環境とは、「Qみたいな」に先行する発話の話者が、自らの発話に続けて「Qみたいな」を発話する（自発話接続）タイプと、他の参加者の発話に続けて別の参加者が「Qみたいな」を発話する（他発話接続）タイプである。以下、それぞれの連鎖環境において「Qみたいな」によって何がなされているかを分析する。

4.1 自らの発話に続けて「Qみたいな」を発話する

データ2 [会話 ID: C002_016 2644.448 秒 -2656.506 秒]

01A 天気いいよ どうか行こうよってゆわれて

02B あっ。

03A あっ [はい はい はい は [h い h: って h。

04B [h そ h う h [hhhh。

05A 旦那のほうは 結構まだ (0.2) 仕事いっ [ばいゴールデンウィークあったから :。

06B [うん うん うん うん うん うん。

07B うーん。 =

08A =じゃ どこ行こっか。 ((頭を右に傾けて、左側を見るように))

(1.6) ((A 頭を傾けたまま声を出さずに笑っている、B 数回頷く))

09B あ。

10B そ [うなんだ。

11A [hhhh

12B hh [h

13A [そうなのよ [:。

14B [ふ :: [:ん。

15A [もう : だから木更津のアウトレット行ったりと [か h ね h:。

16B [うん うん うん うん。

(0.4)

17A->お天気よくてよかった *ね みたいな。 =

*((頭を右に傾けてやや左を向き))

18B= ふ [::ん。

19A-> [いいの あたしで み h た h い h な [h hhh。 ((左向きのまま頭を動かす))

20B [hhh

(0.4) ((A 頭を戻す))

21A-> ごめんね あたしで [み h た h い h な h。 ((頭を右に傾けてやや左を向き))

22B

[uhuhuhu]

データ2では、Aが仲のよい友人Bに、最近あった大学生の息子とのやりとりを語っている。このデータに先行する部分で、Aの息子がガールフレンドと関係を解消したことが話題になっており、データ部分で語られているのはそれよりあとで起こった出来事である。ガールフレンドのいなくなった息子がAを「天気いいよ どころか行こうよ (01)」と誘った、という話に続けて、データの語りがなされている。

注目したい「Qみたいな」は17行目、19行目および21行目に生じている。発話連鎖における特徴として、これらのターンは一連の出来事を語る上で、語られている出来事が一段落したと理解しうる位置のあとで発話されていることに注意したい。17行目の直前のAの発話である15行目で発話されている「木更津のアウトレット行ったりとかね」は、01行目から語られている出来事の帰結として扱うことが可能な物語のパーツの提示になっている。もちろんこれは、この発話がなされたことで語りが終結し、続きが生じる可能性がなくなったということの意味するのではない。出来事に続きがあればその続きを語ることは十分にありうるだろう。重要なのは、語りにおいてここまでが出来事であるという扱いをしたとしても不都合がない、つまり「終わることができる」ということである。この点については、16行目と17行目の間に0.4秒の間が生じていることから、Bは出来事の終結に応じた反応をするべき位置かどうかの判断が即座にはできていないことが見てとれる。出来事の終結が明瞭でないもう一つの要因として、15行目の発話で用いられた「たり」という形式が、他にも事例がある可能性を示していることも考えられる。

つまり、ある出来事を語る中で、一つの終結可能な出来事まで語り終えたのだとして、それが即座に相手にも話の一段落として理解されるとは限らない。むしろ逆に、「Qみたいな」において示されていることがらによって、ここまでがひとまとまりの出来事であったことが遡及的に示されているともいえる。「Qみたいな」が示しているのは、語られた出来事において登場人物（ここではAの息子）が言ったことに対して、語り手が潜在的になしえた発話、ないしは思った（可能性のある）ことがらである。従って、その発話の直前までの部分は、ある種の「感想」を持ちうるまとまりを構成するものとして扱われているといえる。このことから、語られた出来事に対する話し手の潜在的な反応を提示しているということが、この位置における「Qみたいな」の行為に関する特徴として指摘できる。

さらにいえば、この断片においては、17行目におけるAによる一つ目の「Qみたいな」に至ってもなお、出来事の語りとそれについての態度の表明とが明瞭な区分をもって理解されていないように見える。17行目は実際にそのときに天気が良かったということを再現的に述べているのか、なんらかの仮想的な態度を表出しているのか迷う余地があるようにも見える。そして17行目に対して18行目でBは、事実を理解したことを示す応答詞によって反応しており、前者として理解したか、理解を保留したかのいずれかであることが見てとれる。その直前までがひとまとまりの出来事の語りであったことが明瞭に理解されるのは、そのあとの19行目と21行目において、同様の形式の「Qみたいな」がAにより繰り返されることによってである。この繰り返しは、

17 行目に対する B の理解の不十分さに指向して、17 行目の行為をやりなおしたものであるといえる。また 19 行目と 21 行目は笑いを伴っており、語りの終わりの笑い (Jefferson 1988, Holt 2010) を誘う笑い (Jefferson 1979) になっていることも、この発話が語りの終了可能な位置においてなされていることが見てとれる。

類例とあわせて、やや異なるパターンについても検討したい。次のデータ 3 は、仕事の仲間である B, C, D の三人 (現在の勤め先はそれぞれ異なる) が、それぞれ自分の会社の海外の事業所において経験した、現地の従業員の様子について話している。D の 01 行目にある「向こう」とはベトナムである。

データ 3 [会話 ID: T001_014 2110.872 秒-2122.180 秒]

01D でも (.) 向こうの人は : (0.2) もう一分でも ん 伸びると (0.4) はいだめ : みたひいんこう

02B ああ [ahahaha

03C [あっ ch- 中国もそうだったな [:

04D -> [で * その割に全然やってねえじゃねえか [お前 みたいな
*((右親指を立てて右側を指し、右側を見る))

05C [ahaha

06B あー あー あー あー あー

データ 3 はデータ 2 とは異なり、なんらかの具体的な出来事が語られているのではなく、D の経験したベトナムや C の知る中国の事業所において一般的によく生じることがらのような、一定の状況において繰り返し起こったことをまとめて語るような水準の粒度の表現である (cf. Schegloff 2000)。01 行目における「向こうの人」という総称的な指示の仕方 (Carlson 2011) は、こうした理解を可能にする言語的方法の一つである。つまり、例外はあったとしても、D は「向こうの人」の条件にあてはまる従業員を、一般的にある傾向を持つものとして記述しているわけである。

従って 04 行目の「Qみたいな」も、ある実際の出来事において語り手が仮想的になしえた反応であるというより、やや一般化された類似の状況に対してなしうる反応、あるいは持ちうる感想といったものとして提示されている。加えて、そのように態度をある類型として表明することを可能にしているのは「みたいな」という語彙である。「みたいな」には、先行研究においても指摘されているように、類似のものを提示し、かつそれらが正確にそれそのものではないという意味がある。従って、データ 3 において「みたいな」を用いて態度を表明するということは、語られた事態に対してある種の類型に属する態度をとりうる、またはとったということを表明することになるだろう。具体的には、データ 3 における 01 行目と 04 行目では、「Qみたいな」によって、語られた状態にあてはまることながら (ここではベトナムの従業員) に対して、いわば習慣の違いに起因する経験を腹立たしいものとして提示しつつ、それを現在の視点から面白い話として再構成しているといえる。そして、そのように面白い話として扱うという態度は、05 行目において C が笑いによって応答していることから、他の参加者にとっても理解可能になっていると

いえる。

さかのぼって、データ2を見直すと、息子に出かけようと誘われ、戸惑いつつも喜んだという出来事を、想定外で面白かったものとして扱うという態度が示されている。ここで語られたことからはデータ3における慣習的な事態とは異なり、ある時点において起こった具体的な出来事である。しかしその出来事の語り続けて表明される当該の出来事に対する態度は、データ3の場合と同様に、「みたいな」によってマークされている。このことは、個別の出来事についての場合であっても、ある典型的な態度に結びつけるという仕方態度を表明しているということを示す。

重要なのは、ある出来事や事態について、それについてどう思ったかを提示する発話においてこうした語彙が用いられることで何がなされているのかということである。「みたいな」がマークする引用部分はそこでなしうる発話の正確な引用ではないし、その引用元は事実としてなされた唯一正しい発話でもない。先行している状況や出来事は、引用された発話に類するさまざまな発話によって反応しうるものとして扱われ、示されているのはその一例である。つまり、当該の出来事や事態は、ある一種のパターンにあてはまるさまざまな発話によって反応しうるものとして扱われており、それは出来事の側も対応するパターンによって理解されるということにほかならない。まさにこのことは、会話分析の理論的な淵源であるエスノメソドロジーの始祖ガーフィンケルが、「解釈のドキュメント的方法 documentary method of interpretation」という名前で論じた、人々が身の回りで起きる出来事をいかに「説明可能」なものとして扱うかについての方法である(Garfinkel 1967)。解釈のドキュメント的方法とは、「次々に発生する発言や活動という現象を、『ドキュメント』(資料・記録)として、その背後にある『パターン』と結びつけて見ていく解釈の実践(前田ほか 2007)」とされる。一つ一つの発話、誰かのふるまい、あるいはそれらの集積としてのなんらかの活動など、具体的なそれら一つ一つの「ドキュメント」は、一度しか起こらない唯一無二のものである。我々はその一回限りの発話や行為を、なんらかの類似性や共通性によってまとめ、かなりの程度使い回される理解の枠組みによって理解しているはずである。そうした枠組みは社会の成員に共有されていると想定される秩序や規範といったものと関係している。ガーフィンケルはこうした理解の枠組みを「パターン」と呼び、「ドキュメント」と対して位置づけた。一回限りのドキュメントは、パターンと結びつくことによって、例えば行為や活動がなんらかの目的と結びつけられ、そのための一連のふるまいとして位置づけられて理解されることになる。ここでは、「みたいな」が、一つの発話のドキュメントを、その背後にさまざまな類似の発話がありうることを示すことでパターンに結びつけているといえる。そのパターンは一つではないだろうが、その一つに、ある出来事や事態をどのようなものとして受け取ったか、それゆえどのように反応すべきか、という、事態や出来事に対する態度があるとするのは妥当であると考えられる。

一方、データ3には04行目のような「Qみたいな」とは異なる「みたいな」の使い方がされている部分がある。01行目の「みたいな」を含むターンは、Dの語りの一部をなしている。先に述べたように、ここでのDの語りは、話題となっている現地の従業員について、特定の従業

員ではなく、一般的に見られる傾向としてどのようにふるまうかということに記述するものである。このように、発話の引用をマークする「みたいな」は、出来事や事態の語りのあとで、それについての態度を表明するのではなく、出来事や事態の語りそれ自体を構成するパーツとして用いられる場合がある。「みたいな」のこうした使い方について類例を検討してみたい。

データ 4 [会話 ID: C002_016 1023.650 秒 -1040.444 秒]

01A あればっかりはさ：*(1.2) 生まれた年によってかわいそうだよ [ね。

*((咀嚼嚙下))

02B

[ほんとそう思うわ。

(0.2)

03B うーん。

(3.4) ((AB 料理をフォークで刺す動作))

04B 全然違うもん [ね。

05A [全然違う。

06A →だからたまにいるじゃん [なんでこいつ ここに うちに入っ [てるかな みたいな。

07B [うん [うーん うん うん。

(0.6)

08A † どうした みたいな子がいたりするじゃん。

データ 4 はデータ 2 の少し前の時点における断片であり、AB 両者が勤務する職場における新入社員の採用についての話がなされている。04 行目の「全然違う」というのは新入社員の資質や技能に関することであり、「生まれた年によって (01)」相対的に評価が変動するため、十分に優れていても採用されない、あるいは不十分でも採用せざるを得ないといった事態が生じるという話がなされたことを踏まえている。06 行目はそうしたことを表現を変えて説明している発話である。

データ 4 の 06 行目は、「だからたまにいるじゃん」までの部分は「みたいな」の引用スコープに入っていない。これはデータ 3 の 01 行目において、「みたいな」の引用のスコープには「はいだめ:」のみが入っており、その前の部分が入っていないのと同様である。また「たまにいる」という表現は（事実としてここでの記述に当てはまる事例が何度生じたかということとは関わりなく）、低い頻度ではあるが繰り返し起こった事態として一般化して定式化 (Heritage & Watson 1979) している。この点もデータ 3 の 01 行目と類似している。「なんでこいつ」以降の部分が「たまにいる」新入社員のタイプについて説明しているのだが、その説明はその条件に当てはまる新入社員に相対したときに抱くであろう仮想的な感慨を表明するという仕方ではなされている。この点はデータ 3 の場合と異なり、データ 3 では「はいだめ:」という、「向こうの人」の仮想的な宣言、あるいはふるまいから読み取れる態度といったものが「みたいな」のスコープに置かれている。こうした差異は指摘できるものの、どちらもこのターンにおいて発話者は、類似の状況が繰り返し起こるようなことがらについて、その状況を、立ち会った人物の発話の形で提示している。

当該の状況は総称的な、繰り返し起こるような性質のものであり、それゆえこの発話も特定の時点ではなされた具体的なものではなく、一般的にそうした状況においてなしうるものとして提示されている。その意味でこの発話は、こうした状況における可能な発話の一つを例示するものであるといえる。

特にデータ4のような例では、語り手の仮想的な発話がマークされているので、データ2および3の04行目における「Qみたいな」と似ているように見える。この点について指摘しておくなくてはならないのは、データ2および3の04行目が、事態の説明に続けてそれについて発話者が潜在的になしえた反応を提示しているのに対して、データ3の01行目およびデータ4は、総称的ではあるもののなんらかの事態の説明の一部として発話されているということである。このことは、それぞれの発話に後続する応答によって部分的に傍証されている。

先に後者の、なんらかの事態の説明の一部になっている場合について見ていくと、データ3の03行目ではCが「中国でもそうだった」と、01行目までで語られた話と類似の経験を持っていることを主張している。これは second story (Jefferson 1988, 2002) と呼ばれるものと似ている。語られた物語への応答として、類似の経験を語るということによって語りへの同意やメンバーシップの例証といったことを行うということが報告されている。同意やメンバーシップの例証のように、語りに限らず相手の行為に対して支持的にふるまうことを affiliation (Heritage 1984, Stivers 2008) と呼ぶが、語りに対する応答であれば、語りに割って入ることは避けられると考えられ、語りがその位置まで十分に語られたと理解できる位置まで到達してからなされる必要がある⁵。しかし一方、時間的・連鎖的に語りの終了と反応の開始との間が空くことは、 dispreferred (Heritage 1984) な反応の特徴であるため避けられると考えられる。従って、語りに対する second story は、語りの終了を待ち、かつ語りの終了から間髪置かずに開始されることを目指してなされるはずである。その意味で、データ3の03行目はちょうど01行目のDによる語りの終了の直後になされることを指向してなされた発話である。また、データ4の07行目も、語られた話を自らの経験に照らして理解可能であることを示す、理解の表示のトークンを用いて応答している。こうした応答は必ずしも語りの終わりにおいてなされるわけではないが、一段落する時点における可能な応答の仕方ではあるだろう。データ3の02行目は笑いを伴っているが、笑いに先行して「ああ」という理解を主張するトークンが用いられている。これも必ずしも終結時にのみ用いられるわけではないが、ひとまとまりの内容を理解したことを主張していると考えられる。

データ3の01行目の発話末付近は笑いを含んでおり、それに対する02行目は、理解のトークンに続けて笑いが発されている。これは先に述べたのと同様、Jefferson (1979) が論じている laughter invitation と誘い出された笑いである。一方、誘い出された笑いに理解のトークンが先行していることは、この連鎖上の位置においては理解の主張を行うことが優先されるという理解を示していると考えられる。このことも、ひとまとまりの話の終了直後であるということを指向し

⁵ 3.において触れたように、語りがジョークを語るものであるような場合にはその限りではない。

たふるまいであるといえるだろう。つまり、これらの応答ではいずれも、語られた内容という一定のまとまりの話を理解したことが主張される、または例証が試みられる発話がなされているといえる。つまり、データ3の01行目は、事態の語りがまだ続いている、その後端をなしているとして理解されている。

これに対して、前者の、発話者の潜在的な反応を提示する「Qみたいなの」に対する応答では、データ2の19行目および21行目は笑いを伴っており、笑いによる反応がなされている。両者が19行目および21行目を、一連の語りについて、意外でありつつも楽しい出来事であったというように、いわば笑い話として扱うことが妥当だと考えている一つの根拠は、19行目と21行目が笑いながら発話されており、それに対して実際に20行目と22行目はそれぞれ笑いによって反応していることである。同様に、データ3の05行目も笑いによる応答であり、語り手がその直前に語ったことがらを笑い話として扱い、それを理解して笑いによる反応を行なっているのが見てとれるが、これと01-02行目との違いはなんなのか。

すでに論じたことだが、指摘すべき違いは、データ3の02行目においては先に事実の理解を表示し、ついで笑いの誘い出しに応じて笑っているのに対し、データ3の05行目およびデータ2の20行目と22行目はそうした理解の表示のような発話をおかずに笑いによって反応しているということである。特にデータ3の02行目とデータ2の20行目および22行目を比べると、同様に笑いが誘い出されているにもかかわらず、そのような連鎖の違いが生じていることがわかる。この違いは、データ2の20行目および22行目、データ3の05行目では、聴き手が、語り手がすでに語ったことがらについてとっている態度を表出し、それについて同調的な応答をしていることの証左と言える。

4.2 他の参加者の発話に続けて「Qみたいなの」を発話する

前節の議論は参加者が自らの発話に後続して「Qみたいなの」を用いる場合についてのものであった。ついで、別の参加者のなんらかの発話に反応する位置で「Qみたいなの」が用いられる例を見てみたい。データ5は冒頭のデータ1を再掲したものである。

データ5 [会話 ID: T001_014 803.932秒 - 811.446秒] (データ1再掲)

01B そんなでこう*お - 落とすともう (0.4) *こう [奈落の底に落ちてい [くわけよh みhかhんhはh
*((両手を胸の前)) *((右手の指を伸ばし、顔の横から斜め下に動かす))

02D > ごろ<ご r aha:

03C [うん うん うん うん]

(0.5)

04D ->何してくれ [てやが [るんだ お前みたいな

05C [ahaha [hahaha .h

06B [ahaha

会話の概略は冒頭を参照されたい。04行目は、01行目までにBが語った学生時代のアルバイト

トについての話における、登場していない仮想的な登場人物の可能な言動である。さらに言えば、01 行目において語られた、みかんの容器を急坂に落としてしまうという事態を起こした（という仮定の）語りの中の B に対して、語りの中で仮想的な登場人物が B に対してなしうる叱責を模したものである。つまり、その仮定のもとでは、D が 04 行目において発話したような仮想的な登場人物の発話が、もし語りにつながりがあれば語られたかもしれないことがらとして理解可能である。

これが先行する語りを行なった参与者ではなく、語りの聴き手によってなされたということは、聴き手がその語りの続きとして何がありうるかを理解した結果として発話されているといえる。つまり、この発話は語りの聴き手が、その語りにおいて語られたことがらが、語り手にとってどのようなことがらであったかについての理解を示しているものであると考えられる。データ 5 に即して具体的に述べると、01 行目において B により容器を落とす（ということがありうる）ということがらが語られたことに対して、04 行目の「何してくれてやがるんだ お前」という、いわば激しい叱責と聞くことのできる形の発話が D によりなされている。もちろん D が B を叱責しているのではなく、これはそのときに B がその状況に陥ったとしたら被るであろう事態を再現しているのである。つまり、D は B が語った事態について、いわば「叱られるような事態」として理解し、それを表明したといえる。

なお、ここでも 03 行目と 04 行目の間に 0.5 秒の間が空いている。この点はデータ 2 に類似しており、この時点が語りの終わりであり、仮想的な反応を発話することが可能な位置かどうか不明瞭であることを示している。この位置において、語り手以外の参与者から反応がなされるためには、ここが語りの終結であるという理解が必要である。ここでは少なくとも 0.5 秒の間があることで、語りの続きが間髪入れずになされることはないという理解が成立したと考えられる。つまり、「Q みたいな」は、それが可能であることが判明するタイミングを待って発話されている。このことから、聴き手による「Q みたいな」は、語られた出来事に応接する反応として、その終結後になされるものとして組み立てられているということが見てとれる。

もう一つ事例を見てみたい。データ 6 は、仲のいい友人数人でレストランに食事に行った際、A の料理に不可食部（具体的には不明だが、キャベツの芯など）が入っていて、それを近くにいた店員に報告し、店員もその不適切性を認め、対応のためにバックヤードに向かっていったという出来事の後やりとりである。この断片の直前では、その事態に至った経緯や店側からなされるであろう対応について話しており、B は「余裕がないか許容範囲だよ」と発話し、A は「それ面白い考え方ですね」と応じている。断片はそれに続く会話である。

データ 6 [会話 ID: K002_018 1286.906 秒-1293.355 秒]

01B た - 食べれますよ h:h と [か言われちゃうじゃん。

02C [(うん)。

03C あ。

04C hu [huhuhu

- 05A \$ [ん。
 06A \$ うん。
 07A \$ [あの そうですよ。
 08B [huhuhuhu
 09A →うちでは食べてますみたいな。
 10C [hh
 11D [うん。
 12A †もうちょ [とちっちゃ [く切 [るけどみたいな感じ (の)。
 13C [(も)。
 14D [hh
 15C [hh

この断片ではこれまでのものと異なり、かつて起こったことを回想的に語っているのではなく、今日の前で起こったことを話題にし、これから起こるであろうことについて引用的に発話している。01 行目で B は、バックヤードから出てくるであろう責任者の未来の言動を、ほとんど非現実的な冗談として提示している。つまり、今日の前で起こったことに関連して、今から起こるかもしれないこととして、おそらくほぼ起こらないであろうことを冗談として提示しているのである。この断片において再現されている発話の「引用元」はこの時点においては、この世のどこにも存在しない。

これに対して「Qみたいな」で応答しているのが 09 行目の A の発話である。05-07 行目で A は、09 行目に先立って 01 行目の B の発話に対する受け止めと理解の主張を行なっている。09 行目はこれに続く位置で 01 行目についての理解の例証を行なっている発話である。この「Qみたいな」は、先行する 01 行目が記述した事態が発話者である B にとってどのような態度で受け止められたものであったかについての理解の例証になっている。データ 5 と同様、09 行目は、もし 01 行目が記述したような事態が生じたならば、そこでの仮想的な登場人物である、おそらくはレストランの料理長のような人物が行うと考えられる発話になっている。つまりその事態は、そのような発話ないし行為が投げかけられるようなものとして理解されている。

データ 5 と比べて特徴的なのは、09 行目の「Qみたいな」に先行して、\$ を付した 05-07 行目の理解の主張がなされていることである。先に述べたように、A は B が述べた、混入していた不可食部は「許容範囲」であるとする（店側の仮想的な）見解を新奇なものとして受けとっている。つまり B の発話を聞いた時点で、A は B と同じ見解は持っていないことを表明している。05 行目や 07 行目には言いよどみやフィラーに聞こえる発話部分が含まれており、またそれらが数発話にわたって続けられている。時間的にはわずかながら、発話が可能な機会についてみると、何度もやり直したり新規に行なったりすることで数回分の機会が費やされており、非選好的な特徴を示す連鎖になっているといえる。しかし一方で、一つ一つの発話は、フィラーなどを除けば肯定的応答や同意であり、異なる見解に不同意を示しているとはいえず、先に述べたように

理解を主張しているのである。これら一つ一つは affiliative なふるまいとみることができる。この理解の主張は、なんらかの理由で強い理解の表示が遅れうるときに、より容易にできる理解の主張を先行させ、affiliative でないふるまいを回避することになっていると考えられる。

こうした理解の主張を行なった上で、「Qみたいな」が09行目で発話されることにより、一旦主張された理解が、具体的にどのように理解したのかということを改めて例証することになっている。また、09行目の次のAの発話である12行目は、09行目に補足的な内容を追加しており、09行目における理解の例証を強めるものである。ただし、12行目は「みたいな」で終止せず、「感じの」が後続するという形式をとっていることが目を引くが、この点が連鎖や行為にどのように関わっているかは、今後改めて分析したい。

5. 考察

5.1 なぜ態度を直接記述せずにほのめかすのか

4節で述べたように、「Qみたいな」はなんらかの出来事や事態について述べたのち、それに対して語り手がとっている態度や、聞き手が理解した語り手の態度を、その出来事や事態に対してなしうる反応の形で示す方法である。つまり、この方法を用いることにより、語り手が用いる場合も聞き手が用いる場合も、態度それ自体に直接言及したり説明したりすることをせず、いわば可能な反応から、その反応を起こさせたと理解可能な態度を透かし見るように受け手に求めることになる。ではなぜ、そのような回りくどい方法をとるのだろうか。

ここでも二つの場合に分けて考える。ここまでと順序を逆にして、聞き手による「Qみたいな」の場合を先に考えよう。聞き手が相手の態度についての理解を直接説明するのではなく、そこから生じた理解しうる可能な反応によって理解を間接的に示すなどという面倒なことをするのはなぜか。

西阪(2008)における「演技」や山本(2013)の「セリフ発話」についての議論は、この問題に強い助けを提供する。いずれも具体的な出来事について時系列的に語ること、すなわち物語を語る連鎖の中で、語られている出来事について知らないはずの聞き手が、語られた出来事における登場人物の「セリフ」を発話してみせることについて論じている。こうした発話は「語り手が語った情報を手がかりに、積極的に今語られていることの焦点を見つけ、そのエッセンスを抽出し、それを取り込んだ詳細度の高い形で発話を再構成する (p. 150)」ものである。加えて山本(2013)は、そうした発話に「みたいな」が付随しやすいことも指摘している。このように聞き手が語られた物語における「セリフ」を発話することで、聞き手は、語られた物語について十分かつ確に理解していることを立証することができる。単に「面白かったね」「嫌だったね」という類の反応をすることに比べて、その物語の中での誰かのありうるふるまいを、物語に準拠して行うには、「語り手が従事する活動の中において、どのような発話を行うことが適切になるのか、そして何に注意しなければならないか (p. 150)」が十分に理解されていなくてはならない。逆に言えば、それが成功裏に達成された場合、そうした十分な理解がなされていたことの証明になる。

本研究で扱った事例には物語の語りとはみなすことのできないものも含まれているが、上の議論は本研究において述べてきたことと矛盾しない。従って、聴き手が相手の発話に対して「Qみたいなの」という発話による反応をすることは、その発話の内容や語り手の態度に記述的に言及することに比べ、より強制的確な理解を立証することになる。加えて、その的確な理解は、語り手が自ら語った自らの態度を聞いてたどり着いたのではなく、あくまでも語られた事態や出来事を読み、独自に到達したものである。つまり、他の参加者の発話に反応される「Qみたいなの」は、的確な理解に到達したことを証明し、かつ、そこに出来事や事態の語りを通して独自にたどり着いたことを明らかにする手続きであると言える。

このことを踏まえると、語り手による「Qみたいなの」についても同様に考えることができる。語り手は「Qみたいなの」によって語られた事態や出来事についての態度を表出しているが、自らの態度について記述的に説明するのではなく、その事態や出来事の帰趨を通じて間接的に表出する手段になっている。「Qみたいなの」は、語りのありうる続きとして聞くことができるように組み立てられており、その発話によって態度が表出されていることになる。そうした発話から態度を理解することができるかすると、聴き手は、記述的に説明された語り手の態度を理解するのではなく、あくまでも出来事の語りを読み取って理解することになるだろう。従って、この位置での「Qみたいなの」は、語り手の態度を、直接的な説明によらず理解可能にする手続きであると言える。

この二つの位置における「Qみたいなの」が行っていることは、相互に無関係ではないはずである。いずれも出来事や事態の続きの形で、かたや態度を表出し、かたや理解した態度を例証する。このどちらもが、記述的な手段によらずに態度を理解することに指向している。明示的に語られるのは出来事や事態それ自体と、その続きと聞くことのできる発話である。語り手はもちろん経験や事態そのものではなく、あくまでもごく限定された形で再現されたものではあるが、それでもこのことは、同じ事態を経由して同じ態度にたどり着くことを指向したものであると言える。

5.2 経験の語りは「笑い話」にしかないのか

本研究におけるデータのうち、特に4.1において扱った、語り手が自分自身の態度を表出するための「Qみたいなの」は、いずれも笑い話として語りを扱っていることを表出するものであった。それ以外の態度については、4節での分析では扱うことができなかったが、単に笑い話としての態度が理解されているわけではないと考えられる例として以下のようなものがある。

データ7 [会話 ID: C002_016 1704.771秒 -1720.318秒]

01A うちのの

(0.8) ((視線を上))

02A 再雇用

(2.7) ((視線を上→目を閉じてから右))

03A 四年 四年目ぐらいの人なんか [ほんとと淡々としてるもんね。]

- 04B [うん。
- 05B ふ :: ん。
(0.9) ((数回頷く))
- 06A \$ それは僕 もう 仕事したくないってゆうか それ それは僕じゃなくていいですよな
- 07 \$ みたいな [感じ。 ((数回首をかしげながら))
- 08B [hu hu hu hu
- 09A -> [おい おいみたいな。
B [((繰り返し頷く))
- 10B [ふ :::::::::::::::::::::] :::::::::::::: ん。 ((繰り返し頷く))
- 11A -> [お前だろ みたい] な。 ((手元の料理を見ながら))

データ7はデータ2およびデータ4と同一の機会における会話の一部であり、データ4とデータ2の間の時点における断片である。データ4からの話題で、新規採用が減って再雇用が増えており、その再雇用の高齢男性らが現役の頃にくらべて激減した給料に不服を言って満足に働かないという話をしている。その高齢男性のふるまいを再現した06-07行目に対してはBは笑いによって応答しているが、それに対するAの反応である09行目および11行目に対しては、「ふーん」という発話と繰り返しの頷きをしており、笑っていない。この受け止め方から積極的になんらかの態度の理解を読み取るのは難しいが、少なくとも、笑い話として受け取るのは抑制されているとは言えるだろう。この話題がAの職場において現在進行中の問題であること、Aが職責上それらの問題に真剣に対処しなくてはならないこと、といったことはAB両者の共通の認識であり、それらを踏まえてBはAの話を真剣な不満の語り *complaint* として受け取ったことを、おそらくBの応答は指向している可能性がある。

翻って、09行目および11行目においては *laughter invitation* もなされず、笑いによる応答もなされていないのに対して、06-07行目は頭部の小刻みな動作を伴い、コミカルに見えるデザインを指向しているように見え、そうした理解をBも08行目の笑いに反映させていると言える。このことは、不満の語りがなんらかの形で笑い話として受け取りうることを指向してなされるような傾きがあることを示唆する。*affiliation* の観点からはそうしたことは予測できると思われる。Heritage (1984) が *affiliation* について以下のように簡便に述べている。

preferred format actions are normally affiliative in character while dispreferred format actions are disaffiliative. Similarly, while preferred format actions are generally supportive of social solidarity, dispreferred format actions are destructive of it. As we shall see, the uniform recruitment of specific features of turn design to preferred, and dispreferred action types is probably related to their affiliative and disaffiliative characters. (Heritage 1984: 269)

スムーズで積極的な理解や賛同、あるいはその結果としての社会的結束の確認・強化といった

ものに結びつく affiliative であるとする、もちろん不満の語りに対しても affiliative な応答は可能である。しかし、単に不満を述べてそれについての同調を期待するよりは、不満を述べる段階で、その不満が笑い話になるように組み立てるほうが、少なくとも語り手にとっては笑い話としての同調により期待できるため、より affiliative でありうる。この点は極めて興味深い、稿を改めたい。

6. 本論文のまとめ

本論文では、誰かの発話として理解できるものを導く節が「みたいな」によってマークされ、その引用節がターンを構成する発話「Qみたいな」について、以下のことを論じた。

1. 自分の発話に続けて「Qみたいな」を発話する場合、先行する発話までの部分で語った出来事や事態について、語り手がどのような態度でその出来事や事態を再構成しているかを、その状況で語り手がなしうる仮想的な発話を提示することで表出する
2. 他人の発話に続けて「Qみたいな」を発話する場合、先行する発話までの部分で語られたことがらについて、語り手が出会いうる仮想的な登場人物の仮想的な発話を示すことで、その出来事や事態がどのような経験として語られたかについて聴き手の理解を例証する

1. は、なんらかの出来事や、一定の条件下で繰り返し起こる事態について語ったうえで、それについての語り手の態度や、ありうる反応といったものを、発話の引用の形で提示し、それを「みたいな」でマークするものである。2. は、事態についての発話に対して、他の参加者が、仮想的な発話の引用の形で応答するもので、その引用発話が「みたいな」でマークされているものである。

いずれの場合も、語られた事態や出来事に、可能な反応の形で続きを付け加えることで、事態や出来事についての態度を提示する方法になっている。語られた内容についての説明をしたり、それを理解することにとどまらず、それが語り手にとってどのように位置づけられており、それゆえ語り手はどのような態度をとっているのかについて、一方ではそれを可能な反応によって表出し、他方では可能な反応によって理解を例証する方法になっているといえる。

本研究で使用した転記記号

本研究では Jefferson (2004) が確立した自然会話の転記システムに倣って会話を文字に書き起こしている。本研究で使用した記号の一覧を示す。

(0.4) 発話と発話の間、あるいは発話中の空白時間。括弧内の数字分の秒数間が空いていることを示す。

[発話と発話の重なり開始。重なり終了が] によって示されることもある。

>発話< 相対的に速く発話されている。

h 呼気音。笑いを示すのにも用いられる。

- .h 吸気音。
 = 隣接する発話が隙間なく連続している。
 : 延伸。長さに応じた個数が付される。
 - 発話が語句の途中で途切れている。
 ¥ 発話 ¥ 呼気音は明瞭でないが、笑っている声色で発話されている。
 (発話) 発話が不明瞭にしか聞き取れない。
 ((説明)) 発話以外の転記者による補足説明。
 * 非言語的な動作などが発話と重なっている時点を示す。
 →, \$, † 分析上特に注目する行

参照文献

- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carlson, Greg. (2011) Genericity. In: Claudia Maienborn, Klaus von Heusinger and Paul Portner (eds.) *Semantics: An international handbook of natural language meaning* vol. II, 1153-1185. Berlin: de Gruyter.
- 福原裕一 (2013) 「「～みたいな」の分析」『国際文化研究』19: 101-116.
- Garfinkel, Harold (1967) *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall Inc.
- Heritage, John (1984) *Garfinkel and Ethnomethodology*. Cambridge: Polity Press.
- Heritage, John and D. Rod Watson (1979) Formulations as conversational objects. In: George Psathas (ed) *Everyday language: Studies in ethnomethodology*, 123-162. New York: Irvington Publishers.
- 平本毅 (2018) 「会話分析の広がり」平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実『会話分析の広がり』東京：ひつじ書房，1-33.
- Holt, Elizabeth (2010) The last laugh: Shared laughter and topic termination. *Journal of Pragmatics* 42(6): 1513-1525.
- Jefferson, Gail (1979) A technique for inviting laughter and its subsequent acceptance/declination. In: George Psathas (ed) *Everyday language: Studies in ethnomethodology*, 79-96. New York: Irvington Publishers.
- Jefferson, Gail (1988) On the sequential organization of troubles talk in ordinary conversation. *Social Problems* 35(4): 418-442.
- Jefferson, Gail (2002) Is 'no' an acknowledgment token? Comparing American and British uses of (+)/(-) tokens. *Journal of Pragmatics* 34: 1345-1383.
- Jefferson, Gail (2004) Glossary of transcript symbols with an introduction. In: Gene Lerner (ed) *Conversation analysis: Studies from the first generation*, 43-59. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 加藤陽子 (2005) 「話し言葉における発話末の「みたいな」について」『日本語教育』124: 43-52.
- 小磯花絵, 天谷晴香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉 (2020) 「『日常会話コーパス』モニター版の設計・評価・予備的分析」『国立国語研究所論集』18: 17-33.
- Lerner, Gene H. (2003) Selecting Next Speaker: The Context-Sensitive Operation of a Context-Free Organization. *Language in Society* 32(2): 177-201.
- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘 (2007) 『エスノメソロジー：人びとの実践から学ぶ』東京：新曜社。
- メイナード・K・泉子 (2004) 『談話言語学 日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版。
- 西阪仰 (2008) 『分散する身体：エスノメソロジー的相互行為分析の展開』東京：勁草書房。
- Ochs, Elinor, Emanuel A. Schegloff and Sandra A. Thompson (1996) *Interaction and grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pomerantz, Anita (1986) Extreme case formulation: A way of legitimizing claims. *Human Studies* 9: 219-229.
- 佐竹秀雄 (1995) 「若者言葉のレトリック」『日本語学』14(11): 53-60.
- 佐竹秀雄 (1997) 「若者言葉と文法」『日本語学』16(4): 55-64.

- Sacks, Harvey (1974) An analysis of the course of a joke's telling in conversation. In: Joel Sherzer and Richard Bauman (eds.) *Explorations in the ethnography of speaking*, 337–353. London: Cambridge University.
- Sacks, Harvey (1978) Some technical considerations of a dirty joke. In: Jim Schenkein (ed.) *Studies in the organization of conversational interaction*, 249–270. New York: Academic Press.
- Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff and Gail Jefferson (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50(4): 696–735.
- Schegloff, Emanuel A. (2000) On granularity. *Annual Review of Sociology* 26: 715–720.
- Schegloff, Emanuel A. (2007) *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel A. and Harvey Sacks (1973) Opening up closings. *Semiotica* 8(4): 289–327.
- Stivers, Tanya (2008) Stance, alignment and affiliation during storytelling: when nodding is a token of affiliation. *Research on Language and Social Interaction* 41(1): 31–57.
- Suzuki, Satoko (1995) A study of the sentence-final MITAINA. *Journal of the Association of Teachers of Japanese* 29(2): 55–78.
- 白田泰如 (2017) 「態度や関心の共有のための資源としての演技：雑談における演技の分析」『社会言語科学』19(2): 43–58.
- 山本真理 (2013) 「物語の受け手によるセリフ発話：物語の相互行為的展開」『社会言語科学』16(1): 139–159.

Alluding to Attitude through Exemplification: Quotation Marker *mitai-na* in Japanese Conversation

USUDA Yasuyuki

Adjunct Researcher, Spoken Language Division, Research Department, NINJAL

Abstract

This study examines a type of utterance, which quotes other utterances and ends with a quotation marker *mitai-na* in Japanese conversation. Some studies have worked on the type of utterance, but few of them have taken naturally occurring conversations into account. It has not been clear what work is done by such utterances in natural conversation. To solve this problem, this study analyzes the conversation data from the Corpus of Everyday Japanese Conversation using the methodology of conversation analysis. The study's results were as follows. When a *mitai-na* utterance is used following an utterance by the utterer of the *mitai-na*, the utterance shows the attitude of the utterer toward the event or the matter described by the preceding utterance. When following an utterance of the utterance by others, it allows the utterer to show the proper understanding of the attitude of the utterer of the preceding utterance. The two can be seen as a procedure for showing the attitude by connecting a possible continuation of the event or the matter, so that the teller and the receiver can achieve the same attitude toward it.

Keywords: everyday conversation, talk-in-interaction, *Corpus of Everyday Japanese Conversation*, quotation, attitude